

女子大学におけるキャリア教育の在り方とその教育効果に関する検討2： 本学初等教育学科学生のキャリア意識の推移とテキスト分析

大野 祥子・目良 秋子（白百合女子大学）

本稿では2019年度に本学初等教育学科で実施した授業「キャリア研究」について、試行的に導入した量的指標の分析と各回授業後の感想のテキスト分析によって、学生が授業内容をどのように受け止めたかを検討した。半期（全15回）の授業期間中に4回、将来のキャリアをどのくらい具体的に考えているかを6段階評定で問う「キャリア意識の明確性」を測定した。回（4回）×希望ライフコースの型（3タイプ）の2要因分散分析の結果、回の主効果が見られ、初回に比べて前半7回の授業終了後には得点が有意に上昇し、11回目後に有意に低下した後、14回目後には7回目後と有意差のない水準に戻ることが明らかになった。キャリア意識の明確性が最も高かった7回目後と、得点が一時的に低下した11回目後の量的・質的な分析から、学生は授業内容に応じて女性のライフ・キャリアの多様性・柔軟性を理解したこと、また価値観の揺らぎを経験し自らのキャリア・プランを相対化する機会となっていたことが示唆された。

【キー・ワード】 キャリア教育, ジェンダー, ライフ・キャリア, キャリア意識, テキストマイニング

問 題

大学におけるキャリア教育

大学でキャリア教育科目の必修化が始まり10年近くが経過した。その発端は2008年の中教審答申で、「学生が入学時から自らの職業観、勤労観を培い、社会人として必要な資質能力を形成していくことができるよう」、教育課程の内外にわたって大学の教育活動全体を通じて支援することの必要性が提言されたことだという（永作・三保, 2019）。その後、2011年の大学設置基準改正で、各大学・学部の教育上の目的に応じて「学生が卒業後、自らの資質を向上させ、社会的および職業的自立を図るために必要な能力を培うことができるよう」体制を整えることが義務づけられ、キャリア教育は大学の正課の教育課程に組み込まれることになった。

並行して産業界に向けては、2015年に「女性の職業

生活における活躍の推進に関する法律（通称、女性活躍推進法）」が制定され、女性の活躍を促すことは喫緊の課題とされている。同法では女性が職業生活で個性や能力を発揮できるよう、企業が採用や教育、処遇等の面で配慮することが義務づけられている。女性本人の意思決定を尊重するとしつつも、女性に不利な職場慣行を改善することによって女性が労働力として定着することが期待されている。

これら2つの動きの背景には、少子高齢化による労働力不足という問題があると考えられる。とりわけ現代の女子大学生は、これから社会に出る学生として、また女性としてという二重の意味で、就業を継続して職業的自立を図ることがこれまで以上に期待されているといえよう。

しかし、こうした期待と、現実の女性のライフコースの間にはギャップがあるのが現状である。国立社会保障・人口問題研究所（2017）によれば、第一子妊娠

前から無職の女性は全体の23.6%、第一子出産前は働いていたが出産を機に離職した女性が33.9%なのに対して、出産後も仕事を継続する女性は全体の38.3%に留まる。別の調査でも、末子年齢が3歳以下である女性の42.9%、末子年齢0歳に限定すれば54.9%の女性が、正規・非正規いずれの仕事もしていないことが示されている（厚生労働省，2018）。2013年10月～2017年9月の5年間に、育児のために前職を離職した102万人あまりのうち98.7%、介護のために離職した10万人弱のうち75.8%が女性である（総務省統計局，2017）。女性の職業生活は家庭生活との兼ね合いによっていまだに大きく左右されているのである。

家庭でのケア役割のために多くの女性が仕事を離れる背景には「自分の子ども／親の世話は自分でした」という個人の希望があるかもしれない。しかし、待機児童問題がいつまでも解消しないことや、介護保険のサービスは必ずしも家族介護者側のニーズを満たす形では提供されない場合があること、職場でのマタニティ・ハラスメントや「家事労働ハラスメント」（竹信，2013）など、ケア役割と就業の両立を支える制度や社会資源が不足していることが大きく影響しているのは疑いない。支援体制が官民両面で不備な現状の下では、女性がただ「労働市場への参入・定着」という社会の期待に応えようとすれば、家族形成や生活へしわ寄せがいき、葛藤が深まることが予想される。若者が自らの将来を考える際に、職業や家族形成、社会的活動など生活の諸相のバランスについて考慮しながら人生設計を行うことの必要性は高まっているといえる。

ジェンダーの視点を取り入れたキャリア教育の必要性

これは本来は女子学生だけの課題ではなく、性別によらずキャリア教育全般に求められることである。だが、特に女子大学におけるキャリア教育では、職業的キャリアを取りあげるだけでは現実的とはいえない。家庭生活や地域社会での活動等も含めた生活全般を、時間軸に即した移行・変化という視点を持ちながら考えていく必要があるだろう。今までのところ、ジェンダーを視野に入れたキャリア教育の内容や効果について検討する研究は少ない（眞榮城・大野・中山・目良・鈴木，2019；土肥・永久，2019；土肥，2020）。

眞榮城ほか（2019）で報告したとおり、本学初等教育学科の「キャリア教育」は、前身である児童文化学科発達心理学専攻時代に構想された授業プログラムの趣旨を踏襲している。そこでは女性が男性以上に職業生活と家庭生活や地域活動という多重役割を引き受けやすい現実に鑑み、「キャリア」を職業的キャリアに限定せず、生涯にわたる生活全体を含めて「ライフ・キャリア」と捉えている。さらに、キャリアは時間の流れの中で変化するもの＝生涯発達と考え、ライフ・

キャリアの「多様性（女性のライフコースは一様ではないこと）」と「可変性（仕切り直し、キャリア・シフトはいつでも何度でもできること）」を重点的に伝えるキー・コンセプトと位置づけている。また、「他者との共生（人生の選択は自分の思う通りに進むとは限らないが、自分の志向・価値観を貫くことと、他者を尊重することのバランスをとるのが大切であること）」、「資源の活用（一人で抱え込まずに他者や社会資源に頼ってよいこと）」を重要なメッセージとして伝えることを念頭においてプログラムを構築している。キャリア教育の3要素は「自分を知る」、「社会を知る」、「選択する」とされているが（安達，2019）、対象学年が2年次であることから、ライフプランを選択することよりも、社会を知って視野を広げ、自分はどう生きたいかを主体的に考えることに重点をおいている。

これまで複数の女子大学でキャリア科目を担当する中で、毎年「理想の人生年表」を作成した後に「将来をイメージできたのは何歳くらいまでか」を尋ねてきたが、「卒業後5～10年くらいまで」という回答が多かった。そこで学生の想像力が及ばなくなる40代以上の女性にゲストとして来歴を語っていただくほか、ロールモデルとなる身近な女性にインタビューをした結果を互いに共有しあう、労働法や社会保障など働く人の生活を守る社会資源について専門家に解説してもらうなどの回を設けている。また、自分とは異なる考え方に触れて視野を広げるためにグループ・ディス

Table 1 2019年度の授業内容

テーマ	回	内 容
自分について考える	1	オリエンテーション、年表作成
	2	将来の楽しみなこと・不安なこと（グループワーク） 〔宿題〕自分インタビュー
	3	自分について考える（グループワーク）
ライフコースの多様性	4	女性のライフコース（ゲストの講演） 〔宿題〕ロールモデル・インタビュー
	5	ロールモデル・インタビューの共有（グループ・ワーク）
	6	女性のライフコースの多様性について（グループ・ディスカッション）
働くことについて	7	ライフコースの多様性（講義）
	8	キャリアアンカーを考えるワーク
	9	労働法・社会保障について（社会保険労務士による講演）
自立と他者との共生	10	ソーシャルセクターという働き方（NPO職員による講演）
	11	自立的な生き方（男女共同参画推進センター相談員による講演）
	12	家計費を計算してみるワーク
他者との共生	13	上手なコミュニケーション（グループ・ワーク、ロールプレイ）
	14	半期の振り返り（グループ・ディスカッション）
	15	ポートフォリオ作成

セッションを活用するなどの取り組みを行っている。毎年度、前年の反省を生かして少しずつプログラムを修正している。Table 1は2019年度の授業内容である。

眞榮城ほか(2019)では、このプログラムに込めたメッセージが受講した学生に伝わっているかどうか、授業最終回に提出された感想から考察を行った。キャリア・シフトや多重役割を含めた多様なライフコース観を持つに至ったこと、自らのライフ・キャリアについて主体的に考えたことがうかがえたが、プログラムの効果を検証するには受講前後の比較を行う必要がある。そこで今年度は効果測定にふさわしい指標を検討するための準備として、試行的に量的な指標を導入し、継時的な推移を測定する。あわせて各回の感想のテキスト分析を行い、学生が授業内容をどのように受け止めたかを考察し、授業のねらいが達成されるようなプログラムの改善・充実を図る手がかりを得ることを目的とする。

方 法

対象者

必修科目である「キャリア研究」を履修登録している本学初等教育学科の2年生73名を分析対象とした。

調査方法

各回の授業後の課題として、学習支援ツールmanabafolioを通して回答を求めた。

調査時期は2019年9月～2020年1月であった。

調査項目

(1) **キャリア意識の明確性** 「将来のキャリアについて、どのくらい考えていますか。」という質問に対して、「まったく考えられない(1点)」、「あまり考えられない(2点)」、「漠然とは考えている(3点)」、「少し具体的に考えている(4点)」、「かなり具体的に考えている(5点)」、「とても具体的に考えている(6点)」の6段階で回答を求めた。

初回授業後、7回目授業後、11回目授業後、14回目授業後の計4回、回答してもらった。

(2) **理想の人生の年表** 初回授業で「理想4割、現実6割」の感覚で「理想の人生の年表」の作成を求めた。作成された年表の記述をもとに、各人の希望ライフコースを分類した。また、年表作成の際に将来をなんとなくイメージできたのは何歳頃までかを「まったくイメージできない(1点)」～「40代以降のこともイメージできた(5点)」の5段階で回答を求めた。

(3) **テキストデータ** 各回の授業内容についての感想・考察。分量の目安は「600字程度」とした。

倫理的配慮

初回授業の課題提出の際に、「提出された感想の一部を、回答者が誰かを特定できない形で論文・研究で掲載する場合があること」、「同意の有無は単位取得や成績評価には関係しないこと」を伝え、自分の感想を掲載してほしくない場合は、「同意しない」にチェックをつけるよう求めた。8人の学生が「同意しない」にチェックをつけた。

結果と考察

キャリア意識の明確性の変化

「キャリア意識の明確性」の初回授業後の得点は、同じく初回授業で年表を作成した際、どのくらい先(何歳くらい)までをイメージできたかを5段階で尋ねた得点との間に $r=.46$ ($p<.001$)の相関がみられたことから、自分の将来についてどのくらい具体的に考えているかの指標となりうると判断された。希望ライフコースについては、授業初回に作成した「理想の人生年表」に記載されたライフイベントの有無とタイミングに基づいて、国立社会保障・人口問題研究所(2017)と同じ5つのライフコース型に分類した。大学卒業後仕事に就くが、結婚または出産を機に退職して、以降就業しない「専業主婦コース」($N=10$)。学卒後就職し、結婚または出産によって退職するが、のちに復職(パートを含む)する「再就職コース」($N=27$)。学卒後就職し、結婚・出産を経験しても就業を続ける「両立コース」($N=24$)。学卒後就職し、結婚はするが出産はせずに就業を続ける「DINKSコース」(該当者なし)。学卒後就業し、結婚・出産しないで働き続ける「非婚就業コース」($N=4$)。そのほかに、就職、結婚、出産、復職等のタイミングが明確でなく、分類ができなかった「不詳」($N=8$)がいた。

該当者のいなかった「DINKSコース」と人数の少ない「非婚就業コース」と「不詳」を除外して、「キャリア意識の明確性」の得点について、回(4回)×希望ライフコースの型(3タイプ)の2要因分散分析を行った。平均値の推移をFigure 1に示す。棒グラフで示したのは、全体の平均である。3本の折れ線グラフは、希望ライフコースのグループごとの平均値である。また、各回の回答の度数分布をFigure 2に示した。

分析の結果、回の主効果のみが有意($F(3,114)=9.53$, $p<.001$, $\eta_p^2=.20$)であった¹⁾(Table 2)。 η_p^2 の値は、大きい効果量の目安とされる.14を超えていることから(水本・竹内, 2008)、変化の幅は小さくなかったと考えられる。ボンフェローニの方法による多重比較の結果を時系列にあてはめると、初回から7回目後にかけて「キャリア意識の明確性」の平均値は有意に上昇していた。その後11回目後には7回目後より有意に低下するが、14回目後には7回目後と有意差のない水準に

戻っていた。初回後と14回目後の2時点の比較では、14回目後が有意に高い値となっていた。

一人ひとりの得点の動きを見るために、初回後と7回目後、7回目後と11回目後、11回目後と14回目後の2時点間で「キャリア意識の明確性」得点が何点変化したかの度数分布を出した (Table 3)。初回後から7回目後にかけては得点が上昇または変化しなかった人が多く、7回目後から11回目後にかけては得点の変化なしまたは低下した人が多かった。11回目後から14回目後にかけては変化なしが最多だった。つまりFigure 1 に示した平均値の推移は、得点が大きく動いた少数のデータに引きずられたものではなく、多くの学生の

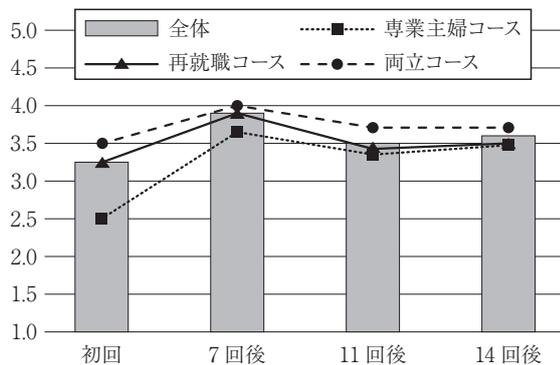


Figure 1 「キャリア意識の明確性」得点 平均点の推移 (全体, 希望ライフコース別)

傾向と一致していたといえる。

半期を通して「キャリア意識の明確性」の得点が上下したことは、アイデンティティの模索を繰り返す青年期の心理として不自然なことではない。11回目後の得点の低下は、この回の授業内容が自治体の男女共同参画推進センターで女性相談の相談員を務めるキャリ

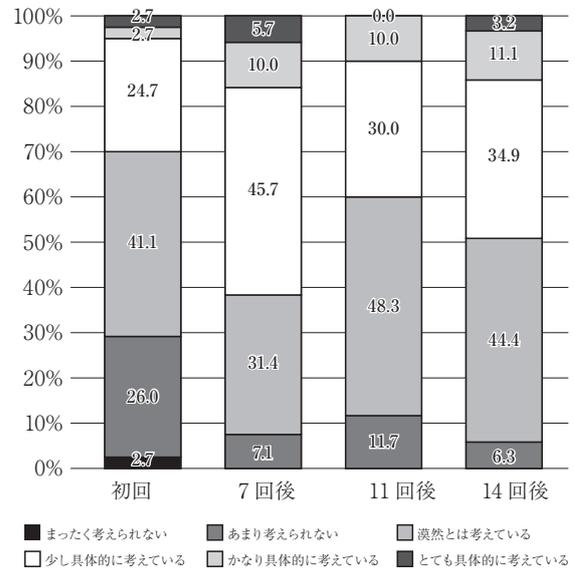


Figure 2 「キャリア意識の明確性」各回の回答の度数分布

Table 2 「キャリア意識の明確性」得点の推移 (回×希望ライフコースの型)

希望ライフコース	N	初回後 M(SD)	7回後 M(SD)	11回後 M(SD)	14回後 M(SD)
専業主婦型	6	2.50(0.55)	3.67(0.82)	3.33(0.82)	3.50(0.84)
再就職型	16	3.25(0.86)	3.94(0.77)	3.38(0.89)	3.50(0.63)
両立型	19	3.47(0.96)	4.00(0.94)	3.68(0.89)	3.68(1.00)
総和	41	3.24(0.92)	3.93(0.85)	3.51(0.87)	3.59(0.84)
回		$F(3, 114)=9.53, p<.001, \eta_p^2=.20$ 初回<7回目 ($p<.001$), 初回<14回目 ($p=.03$), 7回>11回 ($p=.04$)			
希望ライフコース型		$F(2, 38)=1.07, p=.35, \eta_p^2=.05$			
回×ライフコース型		$F(6, 114)=0.97, p=.45, \eta_p^2=.05$			

Table 3 2時点間での「キャリア意識の明確性」得点の変化幅の度数分布

変化の方向	変化幅	初回→7回後	7回後→11回後	11回後→14回後
上昇	+ 4	1 (1.4)		
	+ 3	2 (2.7)		
	+ 2	5 (6.8)		1 (1.4)
	+ 1	33 (44.6)	7 (9.5)	10 (13.5)
変化なし	± 0	26 (35.1)	28 (37.8)	35 (47.3)
低下	- 1	2 (2.7)	18 (24.3)	5 (6.8)
	- 2	1 (1.4)	5 (6.8)	2 (2.7)
欠損値		4 (5.4)	16 (21.6)	21 (28.4)

注) 単位: 人(%)

アカウンセラーから「女性が人生で遭遇する可能性があるアクシデント」として、DV被害や離婚、夫の失業等についての講演を聞いたことが関係しているのかもしれない。「理想の人生年表」の記述やその他のグループワーク²⁾を通して、学生は往々にして「結婚=幸せなこと」というイメージを抱き、楽しみにしていることがうかがえる。結婚後に離婚やDVという思いがけない出来事が起こる場合もあると知って、思い描いていた将来像(ライフ・キャリア)や想定していた将来の家庭像が揺らぐという意味で、「キャリア意識の明確性」の得点が下がることはありうるだろう。あるいは、万一の時に自分や子どもを守るための支えとして経済的な自立の意義を語ってくださったことが、学生にとっては現実の厳しさに触れたと感じられた可能性がある。得点の低下は現実を知って自分の価値観・人生観が揺さぶられた結果だとすれば、そのような経験は視野を広げ、自分の価値観を相対化するためにむしろ有効だと考えられる。この点は後述する感想の分析でさらに検討したい。

初回後と14回目後を比較すると「キャリア意識の明確性」が有意に上昇していたことから、半期のプログラム全体を通して自らのライフ・キャリアについて具体的に考える思考の深まりがあったと考えられる。

テキストマイニングによる感想の分析

Figure 1に見られるような変化は、どのような気づき・思考に伴うものであるかを探索的に検討するため、授業後に提出された感想のテキストマイニングを行った。分析には、目良・眞榮城・大野・中山・鈴木(2020)と同様に、KH corder 3を使用した。

7回目後の感想の分析 Table 1に示したように、7回目の授業までには「自分について考える」、「ライフコースの多様性」という2つのテーマの授業が行われた。このうち「自分について考える」の2回では、この先の授業での自己開示に対する抵抗感を下げするための準備としてグループワークを行った。4回目にはゲストとして50代の女性を迎え、来し方(転職経験やライフイベントに際しての人生選択など)についてお話を伺った。5回目、6回目には各自が40代以上の女性にインタビューを行った結果を互いに共有しあい、7回目には女性を取りまく社会状況が時代によってどのように変化してきたかの講義を行った。

7回目の授業後に提出された66人分の感想についてテキストマイニングを行った。頻出語の上位50位をTable 4に、共起関係にある語を結んだ共起ネットワークをFigure 3に示す。

「自分」、「女性」、「考える」といった頻出語を中心

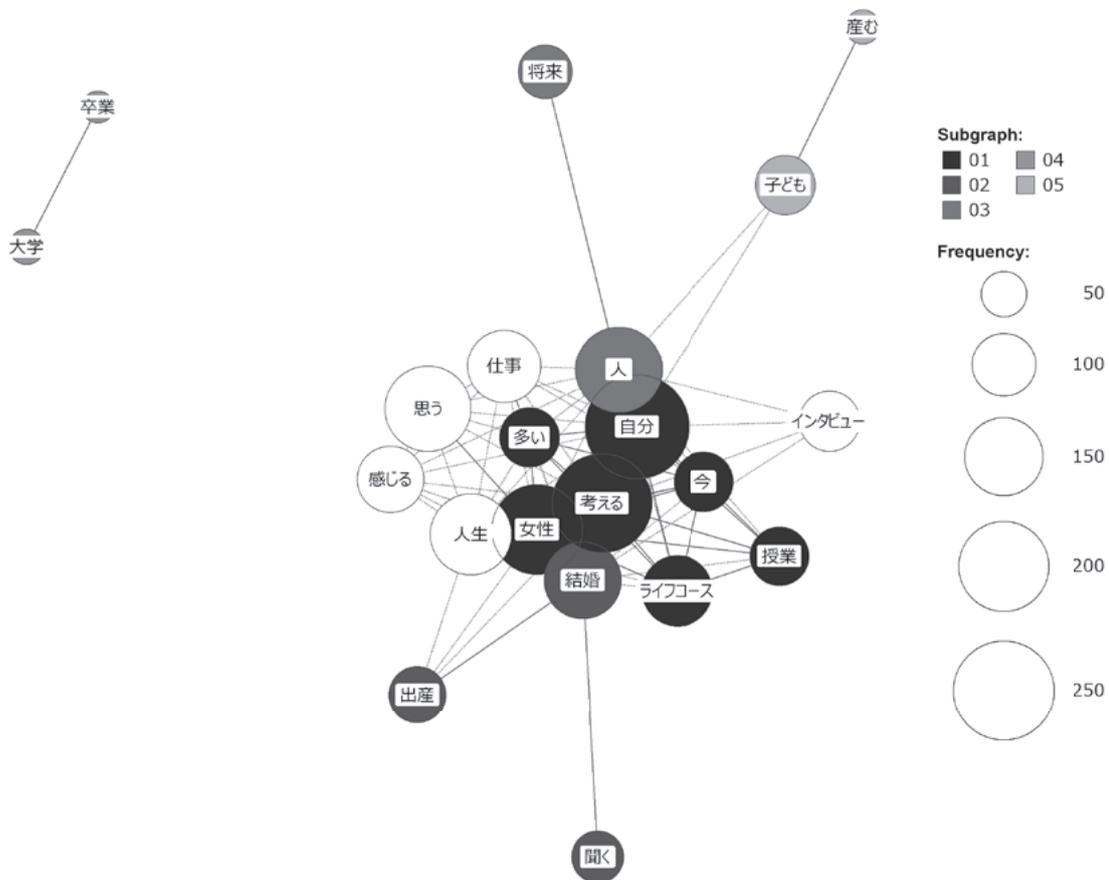


Figure 3 7回目授業後感想の共起ネットワーク

に、「人生」、「ライフコース」やその要素となる「結婚」、「仕事」、「出産」、そして「考える」、「思う」、「感じる」といった語が結びついていることから、女性としての自分の人生について、様々なライフイベントを考慮しながら考察した記述が多く見られたことがうかがえる。また、それらの語と「インタビュー」や「授業」といった語が共起していることから、ロールモデル・インタビューや授業中のグループワークで他の人の考えを聞いた経験が、自分のライフコースについての思索を深めることと関連していると思われる。

「子ども」と「産む」がネットワークの中心から少し外れたところに位置するのは、「女性」の「人生」にとっては「結婚」や「出産」は重要なライフイベントになりうるという意識と、「自分」が「子ども」を「産む」という我が身に起こりうる出来事として考えることの間には、まだ距離があったのかもしれない。

Table 4に現れないものも含め、「多様」、「様々」、「色々」、「それぞれ」など、「多様性」を示す語が89回出現したが、そのうち48回は「ライフコース」、「人生」、「選択」、「生き方」、「道」のいずれかに対する形

Table 4 7回目授業後感想の頻出語（上位50位）

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	自分	268	11	インタビュー	89	21	知る	43	31	今回	32	41	母	28
2	考える	244	12	今	88	22	大切	42	32	辞める	31	42	生活	26
3	女性	201	13	子ども	87	23	生きる	41	33	続ける	31	43	専業主婦	26
4	人	186	14	多い	87	24	育児	37	34	持つ	30	44	選択	26
5	思う	181	15	授業	85	25	子育て	37	35	大学	30	45	分かる	26
6	人生	162	16	出産	80	26	学ぶ	35	36	出来る	29	46	時間	25
7	結婚	146	17	将来	70	27	時代	35	37	産む	28	47	他	25
8	仕事	132	18	聞く	66	28	社会	34	38	就職	28	48	卒業	24
9	ライフコース	125	19	働く	48	29	送る	34	39	少し	28	49	退職	24
10	感じる	109	20	様々	46	30	家庭	33	40	生き方	28	50	見る	23

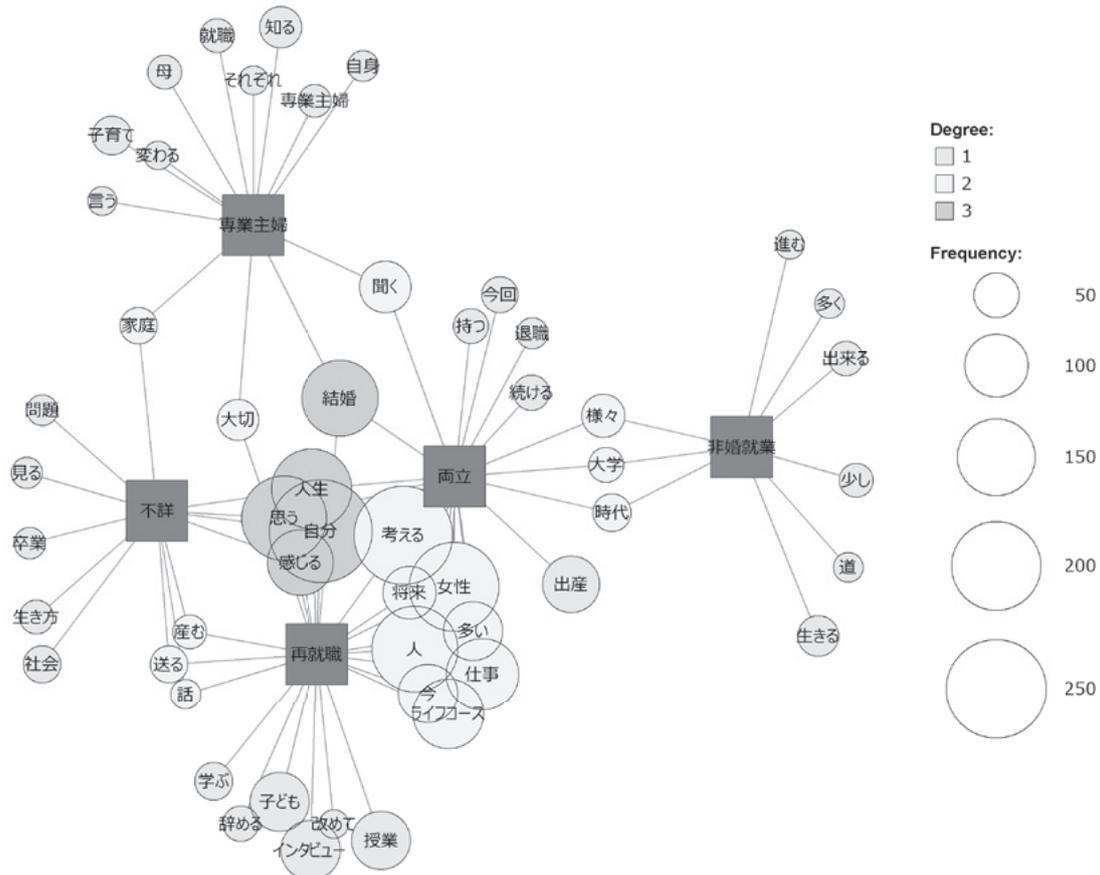


Figure 4 希望ライフコースとの関連で見た7回目 授業後感想の共起ネットワーク

容として使用されていた。インタビュー結果を互いに共有し、多くの女性の実際のライフコースに触れることで、女性のライフ・キャリアが多様であることを認識した結果と思われる。感想の一部を付録として示す。

Figure 4は、希望ライフコースごとに感想に現れる語に違った傾向があるかどうかを見るために、希望ライフコースのタイプを外部変数として組み込んだ共起ネットワークを作成した結果である。

人数が多かった再就職コースと両立コースでは、女性としての自分の人生を考えるキーワードとの共起が多く見られた。両立コースは「子ども」ではなく「出産」への言及が多く、ライフイベントの1つとして出産を意識してはいるものの、大学での学びを生かした自分自身の人生を追求することを大事に考えているのではないかと思われた。それに対して再就職コースでは「出産」より「子ども」が多く見られ、子どものことを優先的に考える意識が再就職型ライフコース希望につながっていることがうかがえた。「授業」や「インタビュー」が多く現れたのも再就職コースであることから、ロールモデル・インタビューによって多数の女性のキャリア・シフトの事例を知ったことで、いったん仕事を離れた後にも色々な人生の選択肢がありうるという再就職型ライフコースの可能性を感じとったのではないかと思われる。

専業主婦コースと非婚就業コースには、「女性」、「自分」、「人生」、「考える」など全体での頻出語の出現が少なく、仕事や結婚、出産を自分の人生の選択肢と考えるかどうかは個人の自由に任されるべき事柄であり、推奨されるライフコース、推奨されないライフコースがあるわけではない。だがこの2群では、就職・結婚・出産を想定している「不詳」の群と比べてもネットワークが淡泊な印象を受ける。眞榮城ほか(2019)で「今後の課題」としたように自己効力感の低さから、「働くことへの自信がないため、なんとなく専業主婦希望」だったり、「自分が結婚できるとは思えないので、なんとなく非婚就業希望」だったりす

る可能性も考えられる。あるいは、「現代は女性が仕事と子育てを両立できるようになった」というステレオタイプがあるために、仕事をしない生活や結婚・出産のない人生の具体的なイメージを持ちにくいということがあるのかもしれない。このようなケースにこそ、女性のライフ・キャリアの多様性と可変性について考えるようなキャリア教育が有効だと考えられる。今日では数の上では少数派にあたる専業主婦やDINKS、非婚就業型のロールモデルとの接点を提供し、女性のライフコースのイメージをさらに広げることが今後の課題となるだろう。

11回目後感想の分析 男女共同参画推進センターのカウンセラーの講演後に寄せられた67人分の感想を対象にテキストマイニングを行った。頻出語の上位50位をTable 5に、語同士の共起関係を線で結んだ共起ネットワークをFigure 5に示す。

頻出語ランキングの上位に上がる語は7回目後と重なるものが多く、この回も自分の人生について考えていることがわかる。上位20位以下ではあるが「離婚」、「DV」、「暴力」などのネガティブな出来事への言及が見られた。また「夫」、「受ける」、「起こる」といった、相手があるために自分でコントロールすることができない事態を示すような語も散見された。

そして、7回目後の感想では他の語との共起関係が弱かった「子ども」が、11回目授業後には「自分」、「結婚」、「思う」などと結びつき、ネットワークの中核を形成していた。講演の「いざという時に自分や子どもを守るための支えとして、女性が仕事を持つことは大切である」というメッセージは理解されたのではないだろうか。

しかし量的分析で検討したとおり、この回の後に「キャリア意識の明確性」得点は一時的に低下した。それがなぜかを探るために、7回目後から11回目後にかけて得点が低下した人(23人)、変化なしの人(28人)、上昇した人(7人)の感想の記述内容を検討した(Table 6)。

Table 5 11回目授業後感想の頻出語（上位50位）

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	自分	232	11	女性	63	21	自身	36	31	子育て	25	41	幸せ	18
2	思う	204	12	人生	59	22	受ける	32	32	起こる	23	42	実際	18
3	考える	134	13	今	56	23	学ぶ	31	33	イメージ	21	43	社会	18
4	聞く	95	14	将来	55	24	離婚	31	34	講演	21	44	分かる	18
5	子ども	91	15	大切	53	25	話	31	35	周り	21	45	前	17
6	感じる	77	16	お話	50	26	DV	28	36	良い	21	46	想像	17
7	結婚	75	17	持つ	48	27	家庭	28	37	時間	20	47	多い	17
8	仕事	70	18	働く	44	28	生活	28	38	必要	20	48	暴力	17
9	今回	68	19	人	42	29	生きる	27	39	少し	19	49	経験	16
10	講義	64	20	知る	39	30	夫	26	40	家族	18	50	自立	16

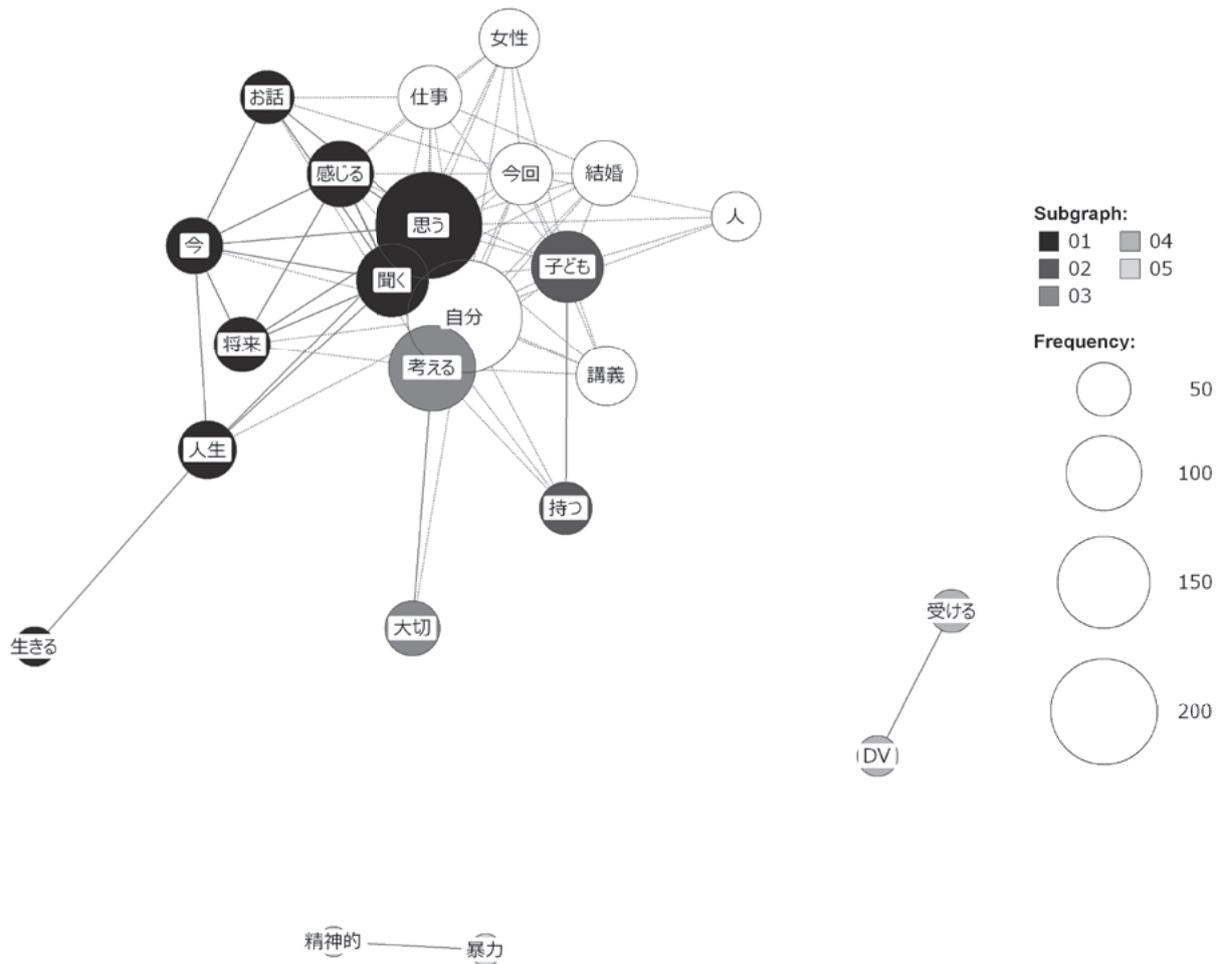


Figure 5 11回目授業后感想の共起ネットワーク

Table 6 7回目後から11回目後にかけての「キャリア意識の明確性」得点の変化の方向ごとの感想の記述

	低下 (N=23)	変化なし (N=28)	上昇 (N=7)
DVや離婚, 夫の失業などの予期せぬライフイベントに言及あり	10 (43.5%)	14 (50.0%)	5 (71.4%)
不安になった, 怖くなった, 衝撃を受けたなど, 動揺した反応の記述あり	5 (21.7%)	7 (25.0%)	1 (14.3%)
それまで思い描いていたライフプランを考え直したという記述あり	12 (52.2%)	7 (25.0%)	0 (0.0%)
自分で意思決定すること, 自分や子どもを自分で守るために自立が必要なことの言及あり	12 (52.2%)	9 (32.1%)	1 (14.3%)

注) 単位: 人(%)

講演では「女性が人生で遭遇する可能性があるアクシデント」として、DV被害や離婚、夫の失業等について、具体的な事例を含めて紹介された。それらの予期せぬネガティブな出来事に言及した感想はどの群にも見られたが、そのような話を聞いて不安や恐れ、衝撃を受けたなど、感情的な動揺という反応を記述したのは低下群と変化なし群のほうが若干多かった。これはそのようなネガティブな出来事は自分の人生にも起こりうると思いが身に引きつけて考えたためではないかと考えられる。感想の例を2人分示す。

今回の講義を受けて、DVやモラルハラスメントは他人事ではないとひしひしと感じました。好きだからこそ、相手の無茶やわがままを許してしまう、自分が我慢さえすればと思ってしまう気持ちにすごく共感しました。しかし、そのことによって、大切な子どもにどう影響を与えているか、母として、妻としての視点に加えて、客観的に今の状況がどうなのか考える力を持って、家庭を築ける力をつけたいです。

本日の講義を聞いて、少しだけ自分の人生に対し不安を持つようになりました。これはマイナスな

安ではなく、自分が今まであまり考えてこなかったことを考えたことにより生まれたプラスな不安であります。

また、それまで思い描いていたライフプランを考え直したという記述は低下群に多く見られた。感想の例を示す。

子育て中の母親が働くことにより、自分自身にも父親にも子どもにもメリットがたくさんあることを知ることができた。講義を聞く前は働かなくてもどうにかなるという考えがどこかにあったが、パートナーと万が一のことがあったとき、自律していることはとても大切なことだと感じた。

「自分は将来は教師になって、結婚して子どもを産むのだ。」と当たり前前に考えていました。しかし、教師にならないかもしれないし、結婚もしないかもしれません。人生には三つのトランジションがあるとおっしゃっていました。実際に自分がどのような取捨選択をするかわかりません。わからないからこそ、アダプタビリティを高めていく必要があると思いました。

このように11回目に「キャリア意識の明確性」得点が低下したのは、「人生には自分の意図しないアクシデントが起こりうる」という現実に触れてそれまでのライフプランが揺らいだ学生がいたためであることが示唆された。しかし同時に、低下群では「だから自分で考えて意思決定すること、自分（や子ども）の身は自分で守ることが必要だ」といった記述も一番多く見られた。受講生の一部ではあれ、社会の現実を知ってより広い視野で人生を考え、自立・自律の大切さに思い至ったとすれば、授業のねらいはある程度達成されていたと考えられる。

全体的考察と今後の課題

保育・教育系学科に特有の事情として、学生の多くが学科選択・入学の時点で既に「将来就きたい職業」を想定していることが挙げられる。過去にはゲストスピーカーの講演を聞く際に、女性のライフコースの多様性や可変性に着目するのではなく、保育・教育職の職務内容に関する情報を求める傾向（「私は保育士希望なので、ゲストの幼稚園教諭に質問したいことはありません」など）が見られたこともある（眞榮城ほか、2019）。また、学修が進む中で保育・教育以外の職業への関心が勝ったとしても「初等教育学科に入学した以上、保育・教育職に就かねばならない」と頑なに考えてしまい、進路についての葛藤を抱える学生も

見受けられる。

Marcia (1966) は、エリクソンの発達理論で青年期の発達課題とされるアイデンティティ達成に至る過程には、その人にとって意味のあるいくつかの可能性について迷い、決定しようと苦闘する時期を経験すること（危機）が必要だとした（無藤、1979）。本学科の学生たちが当初の希望どおり保育・教育職に就く場合にも、他の可能性を吟味した上で主体的に選ぶとる過程を経るかどうかによって、職業的アイデンティティやキャリア選択の確信度に違いが生じることが考えられる。また、現実の女性のライフコースは多様で可変的であることを知っていれば「人生の選択を間違っはいけない」と過度に怖れを抱くこともないだろう。専門の学修半ばである2年次の段階で、保育・教育という特定の職業に特化せず、女性としてのライフ・キャリアを考える経験は、ともすると「早期完了型」になりがちな本学科の学生には意味のあることだと思われる³⁾。

その意味でこの授業が目指すべき教育効果とは、本研究で試行的に導入した「将来のキャリアについてどのくらい具体的に考えているか」という指標の得点が半期のプログラムを通じて一次的に上昇することではないといえるだろう。この授業のねらいが果たされたかどうかを検討するためには、一時的に将来のイメージが不明確になることもありつつ、それが視野の広がりにつながって自分の価値観が相対化され、更新されていくような「揺らぎ」を捉える多次元的な指標が必要だと考えられる。

本稿の分析結果を踏まえて、2020年度のプログラムでは、学生が授業内容をどのように受け止め、どのようにキャリア意識が変わったかをよりきめ細かくとらえるべく、指標を増やして測定を行っている。今後、授業のねらいに即した教育効果の検討を行ってみたい。また希望ライフコース型や、初等教育コース／児童教育コースごとの分析も試みて、学生の志向の多様性を把握し、より多くの学生が自分のキャリアを主体的に考える機会となる授業の設計につなげていきたい。

文 献

- 安達智子. (2019). *自分と社会からキャリアを考える：現代青年のキャリア形成と支援*. 晃洋書房.
- 土肥伊都子. (2020). ジェンダーの視点に立ったキャリア教育を考える. *神戸松陰女子学院大学研究紀要*, 1, 41-56.
- 土肥伊都子・永久ひさ子. (2019). 大学全入時代のキャリア教育：ジェンダーの視点からの検討. 日本心理学会第83回大会公募シンポジウム. https://www.micenavi.jp/jpa2019/search/detail_program/id:62 (最終アクセス日 2020.5.28)
- 国立社会保障・人口問題研究所. (2017). 現代日本の

注

- 結婚と出産：第15回出生動向基本調査（独身者調査ならびに夫婦調査）報告書（全体版）。http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_report4.pdf（最終アクセス日 2020.5.28）
- 厚生労働省. (2018). 平成30年国民生活基礎調査の概況 統計表第4表。
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosal8/index.html>（最終アクセス日 2020.5.28）
- Macia, J.E.. (1966). Development and validation of Ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.
- 眞榮城和美・大野祥子・中山千秋・目良秋子・鈴木 忠. (2019). 女子大学におけるキャリア教育の在り方とその教育効果に関する検討1. *生涯発達心理学研究* (白百合女子大学生涯発達研究教育センター), **11**, 63-72.
- 目良秋子・眞榮城和美・大野祥子・中山千秋・鈴木 忠. (2020). 女子大学におけるキャリア教育の教育効果の検討：テキストマイニングによる分析. *日本発達心理学会第31回大会ポスター発表*.
- 水本 篤・竹内 理. (2008). 研究論文における効果量の報告のために：基礎的概念と注意点. *英語教育研究* (関西英語教育学会), **31**, 57-66.
- 無藤清子. (1979). 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性. *教育心理学研究*, **27**, 178-187.
- 永作 稔・三保紀裕. (編). 田澤 実・本田周二・杉本英晴・家島明彦・佐藤友美. (著). (2019). 大学におけるキャリア教育とは何か：7人の若手教員による挑戦. ナカニシヤ出版.
- 総務省統計局. (2017). 平成29年就業構造基本調査結果の概要. <http://www.stat.go.jp/data/shugyou/2017/pdf/kgaiyou.pdf>（最終アクセス日 2020.5.28）
- 竹信三恵子. (2013). *家事労働ハラスメント：生きづらさの根にあるもの*. 岩波書店.

- 1) 2要因分散分析で除外した、「非婚就業型」, 「その他」を含めたクラス全員のデータで、回ごとの平均値について1要因分散分析（反復測定）を行った場合も、 $F(3,150)=12.327$, ($p<.001$, $\eta_p^2=.198$)と有意な結果が得られた。多重比較を行ったところ、初回後と比べて7回目後 ($p<.001$), 11回目後 ($p=.05$), 14回目後 ($p=.01$) が有意に高く、11回目は7回目より有意な低下が見られる ($p=.01$) という、本文で示した分析とほぼ同じ結果が得られた。
- 2) 2回目に行った「将来の楽しみなこと、不安なこと」を話し合ってKJ法で分類するグループワークでは、「楽しみなこと」として結婚にまつわる事柄（結婚すること、結婚式を挙げること、など）が全グループ合わせて38件、子育てに関する事柄（子どもを持つこと、子どもにかわいい服を着せること、など）が33件、どんな家に住み、家族で何をするかなど家庭生活に関する事柄が16件挙げられた。「不安なこと」では、離婚や夫の浮気など結婚後の生活に生じるネガティブな事態を挙げたものは全体で7件だったのに対して、「結婚できるかどうか」は29件挙げられた。
- 3) たとえば教養系など特定の職業と結びつかない学科の場合には、反対に「何にでもなれてしまうが故に選択ができない」ことが進路に関する悩みになるかもしれない。そのような場合には「学生がそれまで抱いていたライフプランを揺さぶること」とは違ったねらいを打ち出す必要があると考えられる。

(2020年4月30日受稿 2020年11月23日受理)

付録 7回目授業後の学生の感想（一部抜粋）

- 女性のライフコースを学んで私が一番衝撃を受けたのが、専業主婦をしている人が少ないということである。夫が会社で働き、妻は家で家事をしているお家が多いと思っていたが、女性も働きに出ている人が多いということが分かった。私は、結婚したら専業主婦になりたかったが、私の母親から自分で自由に使えるお金が欲しいという考えを持つようになると言われて、少し考えるようになった。
- 私がこの授業を通して、もっとも考えさせられたことは、昔の生きかた、つまり母親のライフコースと自分のライフコースは大いに異なるということです。母親の時代のように、20代前半で結婚をし、子どもを産んで、また仕事する。といったコースが普通ではなくなってきました。自分に与えられた選択肢はいくつもあり、自由に選ぶことができる時代と言えらると思います。これは良いことですが、逆の見方もすることもできます。選択肢がありすぎて、やりたいことが見えてこない、ということが挙げられます。様々なライフコースが存在し、誰かの真似をしていれば良いという時代ではなくなってきたので、自分でどのようなライフコースを歩みたいのかを学生のうちから考えることが大切だと思いました。
- 今回の授業で女性のライフコースについて学んで、ライフコースには色々なパターンがあるということ、大人になるって大変なことだということを特に感じました。最初に自分がインタビューをしたのをもとにグループで紹介し合っ、結婚や出産の時期はもちろん、仕事やプライベートなど全ての項目が違って、どれが正解ということはなく、一人一人が自分のことを考えて人生を送っていると感じました。
私は理想のライフコースについて書いたときに再就職コースを選びましたが、実際に結婚出来るかもまだ分からないし、就職できるかもまだ分からないということをこの授業を通して感じました。大人になるということは大変だけれど、正解はなく自分が好きな道に進めるようにすることが大切だと思いました。結婚や就職をする時に、すぐに選択肢を絞ってしまうのではなく、よく考えて本当にこれで良いのかということを考えることが大切ではないかと考えました。
- 今回、いろんな方のライフコースを見て、案外大人は自分が思ったように生きていないとわかった。しっかりしろと子どもには言うが、蓋を開ければほとんどの人が落ち着きのない経歴ということが多かった。その集計結果は私にとって大きな励みにもなった。不器用に生きていても大丈夫と思わせてくれた。
完璧に育児をこなし、完璧に結婚生活を送って、全て完璧にこなすのは不可能なのだろう。何かしら悩みながら進路を変えるのも十分ありな話だ。とても勇気がもたらされた。
- 今までの講義を受けて改めて感じたのは、「女性だから」という性別を理由にライフコースを決めなくてもいいんだということです。身近にいる40歳以上の女性にインタビューをし、その結果についてグループで話し合っる際に感じたのは、思っていた以上に共働きしていたり、あるいは子育てがひと段落して働き始めた方が多くいるということです。女性は家庭に入るだけでなく、社会に出て働くというイメージが強くなっているだけでなく、実際もそうなのだと思います。おそらく私たちがその年代になった頃は今以上に働く女性が増えているのではないかともしました。子育てが一段落して時間に余裕ができたからなど働く理由は様々だと感じました。
- 今回の授業を通して女性のライフコースについて考えたことは、人それぞれ様々な道があり全く同じ人生の人はいないと言うことを改めて感じました。多少は似ている点があったとしても、どんなことを経験してきたのよように過ごしたか、100人いたら100通りもあり、全く異なっていることが分かりました。例えば、ある人は3回から4回ほど転職していてその中にはCAも経験している人もいました。また、最初から就職せず専業主婦として過ごしている人もいました。もし転職するとしても、自分に行動力があり、やる気があればなんでもできることが分かりました。そのように考えると、自分の就職について今まではとても重く考えていて不安な気持ちでいっぱいでしたが、自分に強い気持ちとやりたいことをやるためならなんでもやるぞという行動する力があれば何とかなると考えました。

Ohno Sachiko & Mera Akiko. (Shirayuri University) *Considerations about the way of career-relevant curriculum and its effects in women's university 2 : A quantity and quality analysis of career perspectives among students under a childcare and primary education university department*. RESEARCH IN LIFESPAN DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY, 2020, No.12, 79-90.

This study reports the effects of career studies (Introduction to Career Education) on the career perspectives of students under the childcare and primary education department of a university. This study aimed to analyze the responses of these students to career studies-related classes quantitatively and qualitatively and to investigate how they have contemplated their own life careers through the class programs. Seventy-three sophomores answered a preliminary question on a six-point scale, which measured to what extent they clearly thought about their own future. The data were collected on four occasions out of 15 classes from September 2019 to January 2020. A two-way ANOVA (4 occasions \times 3 types of ideal life course) showed that the main effect of occasion was significant; the scores were significantly higher just after the 7th class than that of the 1st class. The score declined significantly just after the 11th than that of the 7th, and rose to the same level as the 7th just after the 14th. The results of a text analysis of their comments after the 7th and 11th classes indicated that students' considerations corresponded to the contents of each class. They appeared to have understood the variety and plasticity of women's life-course and received a wider perspective on this topic. Based on these findings, appropriate indicators for measuring educational effects are discussed.

[Key words] career education, gender, life-career, career perspective, text-mining